

親子で続ける「読み聞かせ」の効果とは？
～読み聞かせで『学力』『運動能力』『夢』を育む～



読み聞かせに込めた親の思い

世界中が新型コロナウイルスに翻弄され、人とのつながりが急激に減少した中、我が家には長男が誕生した。外出や交流が制限される中で、夫婦で「こどもに何をしてあげられるか」を話し合い、たどり着いた答えが『読み聞かせ』である。社会的接触が減っても、親子が触れ合う時間だけは確保したいという思いからである。

読み聞かせを続けるうちに、長男は絵本の「ワンワン」「いないいないばぁ」といった台詞を喃語や一語文で繰り返すようになった。1歳を過ぎたころには、周囲の乳幼児と比べても発話がやや早いのではないかと感じ始めた。この経験から、「読み聞かせは発達に影響を与えるのではないか」という疑問が生まれた。

そこで、読み聞かせの頻度と乳幼児の発達との関係について調査し、統計的に検証することにした。読み聞かせがどのような影響を与えるのかを明らかにすることで、コロナ禍のように人との接触が制限される状況でも、家庭でできる効果的な関わり方を示すことができると考えた。

1．幼児期における読み聞かせの効果と実態（ベネッセ教育総合研究所「幼児期の家庭教育調査」（２０１８年））



２０１８年のベネッセ教育総合研究所の調査では、幼児期から児童期に読み聞かせを行う家庭ほど、子どもの「言葉のスキル」や「論理性」が高い ことが示されている。また、年齢が上がるにつれて読み聞かせの頻度や時間が減少する傾向も明らかになっている。これは、我が家で次男の誕生により長男への読み聞かせ時間が減った経験とも一致し、家庭環境の変化が読み聞かせの継続に影響している可能性を示している。

一方で、年長期まで読み聞かせを続けている家庭では、小学１年生での「ひとり読み」頻度が高いという結果が得られている。読み聞かせは乳児期だけでなく、幼児期後半の読書習慣にも影響を及ぼすことが統計から読み取れる。

これらの統計結果から、読み聞かせは年齢によって減少しやすい一方で、継続するほど言語発達や読書行動に良い影響が見られることがわかる。

2．読書と学力の関係（文部科学省　国立教育政策研究所「令和８年度　全国学力・学習状況調査の結果（概要）」（令和８年８月））※全国の小学６年生、中学３年生



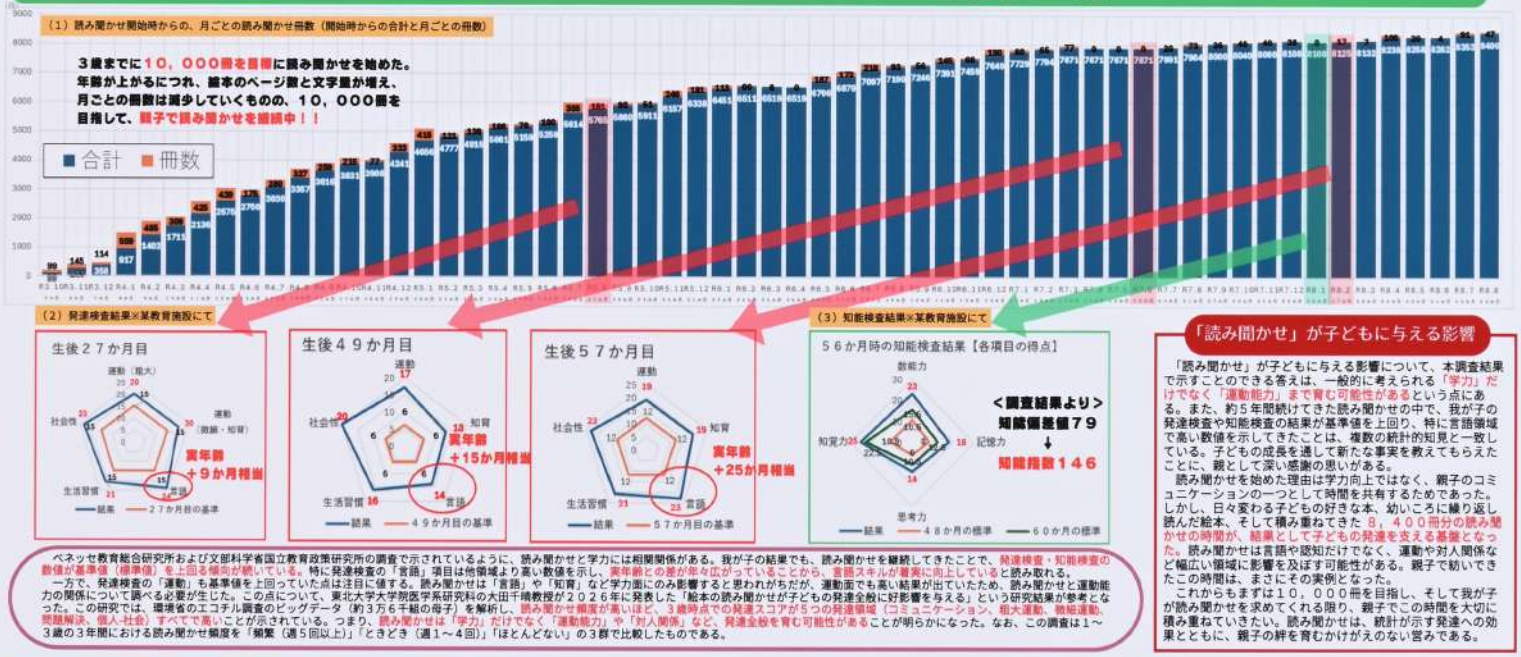
幼児期の読み聞かせによって育まれる「言葉のスキル」や「論理性」が、就学後にどのような影響を及ぼすのかは、令和８年度全国学力・学習状況調査の結果から具体的に読み取ることができる。

調査２（１）では、読書量と学力（小学校国語・算数、中学校国語・数学）の関係がクロス集計で示されている。小学校段階では、読書量が多い児童ほど平均正答率が高く、国語・算数ともに明確な正の相関がみられる。読書量の差による平均正答率の開きも大きく、読書習慣が基礎的な学力形成に強く寄与していることがわかる。一方、中学校段階では様子が異なる。読書量が最も多い層でも平均正答率は上位に位置せず、国語では６段階中４番目、数学では５番目となっている。また、読書量による正答率の差も小学校より縮小し、国語では小学校の１４ポイント差に対し、中学校では８．１ポイントにとどまる。これは、学習内容が高度化・多様化する中で、読書量だけでは学力向上に直結しにくくなる可能性を示している。

調査２（２）では、「読書が好きかどうか」と学力の関係が示されている。結果は一貫しており、読書が好きな児童生徒ほど平均正答率が高い。小学校国語では２０．７ポイント、中学校国語でも１９．３ポイントの差があり、読書量よりも「読書への肯定的態度」のほうが学力と強く結びついていることが明確である。中学生では読書量が多すぎても学力向上につながらない一方で、読書を好む姿勢そのものは学習意欲や理解力に影響していると考えられる。

これらの結果から、幼児期の読み聞かせによって育まれた言語的基盤は、就学後も読書習慣や学力に影響を及ぼし続けることがわかる。特に、年齢が上がるほど「読書量」よりも「読書を楽しむ気持ち」が学力と強く関連する傾向が示されており、読み聞かせが読書への肯定的態度を育てる点でも重要であると読み取れる。

3．親子で続けた読み聞かせ５年間の記録（＜調査期間＞令和３年１０月【生後５か月】～令和８年８月【生後６３か月】）



ベネッセ教育総合研究所および文部科学省国立教育政策研究所の調査で示されているように、読み聞かせと学力には相関関係がある。我が子の結果でも、読み聞かせを継続してきたことで、発達検査・知能検査の数値が基準値（標準偏）を上回る傾向が続いている。特に発達検査の「言語」項目は他領域より高い数値を示し、実年齢との差が年々広がっていることから、言語スキルが最も向上していると読み取れる。

一方で、発達検査の「運動」も基準値を上回っていた点は注目に値する。読み聞かせは「言語」や「知育」など学力面にのみ影響すると思われがちだが、運動面でも高い結果が出ていたため、読み聞かせと運動能力の関係について調べる必要が生じた。この点について、東北大学大学院医学系研究科の大田千晴教授が２０２６年に発表した「絵本の読み聞かせが子どもの発達全般に好影響を与える」という研究結果が参考となった。この研究では、環境省のエコチル調査のビッグデータ（約３万６千組の母子）を解析し、読み聞かせ頻度が高いほど、３歳時点での発達スコアが５つの発達領域（コミュニケーション、粗大運動、微細運動、問題解決、個人-社会）すべてで高いことが示されている。つまり、読み聞かせは「学力」だけでなく「運動能力」や「対人関係」など、発達全般を育む可能性があることが明らかになった。なお、この調査は１～３歳の３年間における読み聞かせ頻度を「頻繁（週５回以上）」「ときどき（週１～４回）」「ほとんどない」の３群で比較したものである。

「読み聞かせ」が子どもに与える影響

「読み聞かせ」が子どもに与える影響について、本調査結果で示すことのできる答えは、一般的に考えられる「学力」だけでなく「運動能力」まで育む可能性があるという点にある。また、約５年間続けてきた読み聞かせの中で、我が子の発達検査や知能検査の結果が基準値を上回り、特に言語領域で高い数値を示してきたことは、複数の統計的知見と一致している。子どもの成長を通して新たな事実を教えてもらえたことに、親として深い感謝の思いがある。

読み聞かせを始めた理由は学力向上ではなく、親子のコミュニケーションの一つとして時間を共有するためであった。しかし、日々変わる子どもの好きな本、幼いころに繰り返し読んだ絵本、そして積み重ねてきた８，４００冊分の読み聞かせの時間が、結果として子どもの発達を支える基盤となった。読み聞かせは言語や認知だけでなく、運動や対人関係など幅広い領域に影響を及ぼす可能性がある。親子で紡いできたこの時間は、まさにその実例となった。

これからもまずは１０，０００冊を目指し、そして我が子が読み聞かせを求めてくれる限り、親子でこの時間を大切に積み重ねていきたい。読み聞かせは、統計が示す発達への効果とともに、親子の絆を育むかけがえのない営みである。

4．この素晴らしい「読み聞かせ」の文化を、社会に広げるためにできること

4．(1)(4)【調査対象】０才から５歳までの１７人のこどもの保護者　【調査時期】２０２６年８月３０日
4．(2)(3)こどもの読書行動の実態－調査結果からわかること－（東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所：２０２３年１０月１９日）

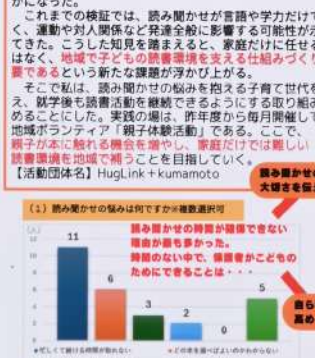
「読み聞かせ」で子育てに悩む保護者を救う

今回の統計グラフコンクールへの取り組みを通して、読み聞かせや読書活動が子どもの発達に大きな効果をもたらすことを改めて確認できた。しかし【４（１）】が示すように、読み聞かせの重要性を理解していても、家庭の事情や時間的制約から「うまくできない」と悩む保護者が多い現状も明らかになった。

これまでの検証では、読み聞かせが言語や学力だけでなく、運動や対人関係など発達全般に影響する可能性が示されてきた。こうした知見を踏まえると、家庭だけに任せるのではなく、地域で子どもの読書環境を支える仕組みづくりが必要であるという新たな課題が浮かび上がる。

そこで私は、読み聞かせの悩みを抱える子育て世代を支え、就学後も読書活動を継続できるようにする取り組みを始めることにした。実践の場は、昨年度から毎月開催している地域ボランティア「親子体験活動」である。ここで、親子が本に触れる機会を増やし、家庭だけでは難しい読書環境を地域で補うことを目指していく。

【活動団体名】HugLink＋kumamoto





「親子体験活動」を中心とした実践

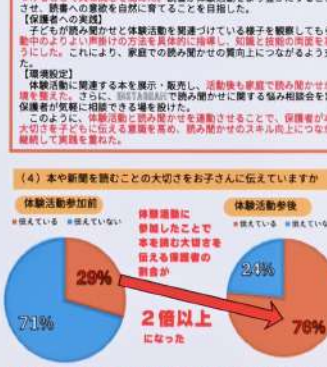
日々子育てに追われる中で、読み聞かせの時間や保護者自身が学ぶ時間を十分に確保できない家庭は少なくない。そこで、読み聞かせを保護者も、子どもがその良さを実感し、保護者が読み聞かせの方法を学べる場として「親子体験活動」を実施した。

【こどもへの実践】
体験活動と関連する内容の読み聞かせを行い、本の世界と実際の体験を結びつけることで興味関心を高めた。読書が体験活動をより豊かにすることを実感させ、読書への意欲を自然に育てることを目指した。

【保護者への実践】
子どもが読み聞かせと体験活動を関連づけている様子を観察してもらい、活動中のよりよい声掛けの方法を具体的に指導し、知識と技術の向上を高めるようにした。これにより、家庭での読み聞かせの質向上につながるような支援した。

【環境設定】
体験活動に関連する本を展示・販売し、活動後も家庭で読み聞かせが続く環境を整えた。さらに、BRITAMARI で読み聞かせに関する悩み相談会を実施し、保護者が気軽に相談できる場を設けた。

このように、体験活動と読み聞かせを連動させることで、保護者が本を読む大切さを子どもに伝える意識を高め、読み聞かせのスキル向上につながるよう継続して実践を重ねた。



体験活動をとおして、保護者の意識を大きく変化させることができた

保護者に寄り添い活動する

子育て世代が抱える読み聞かせの悩みは、主に「時間がない」ことと「やり方がわからない」ことの２点であった。そこで、体験活動と読み聞かせを結びつけることで、この課題に対する具体的な解決策を示すことができた。結果として、本や新聞を読むことの大切さを子どもに伝えている保護者の割合が２倍以上に増加し、想像を超える成果が得られた。

実践を通して強く感じたのは、どの家庭も読み聞かせに対して何らかの悩みを抱えているという事実である。だからこそ、保護者の気持ちに寄り添いながら、読み聞かせのよさを広げていく取り組みを継続することが重要だと考える。今後も、家庭だけでは難しい部分を地域活動として補いながら、読み聞かせの価値をより多くの家庭に届けていきたい。

親子で続ける「読み聞かせ」の効果とは？

「動物園のおいしゃさんになりたいな。」これは、今、５歳の息子が語る夢である。物心ついたころの夢は「キリンになりたい」だった。このこと、本棚には「動物の絵本」や「図鑑」を並べ、これらを読み進める中で、動物にも病気があり、それを治す獣医がいることを知った。そこで本棚に「獣医の一日」「病気のしくみ」「治療をなくすには」など、医療に関する本を並べるようになった。このように、うちの本棚は息子の夢に合わせて本の種類が変わり、息子の夢とともに成長していた。

また、宇宙科学館へ行く前後には宇宙の本を、夏には海や祭りの絵本を、冬には雪や正月の本を並べてきた。すると息子は「宇宙に行ってみたい」「星空でりんごあめを食べたい」など、まだ経験していない世界への好奇心や興味心を次々とどけるようになった。

絵本を通して育まれるのは、学力や運動能力だけではない。本の環境を整えることで、こどもは「夢を思い描き、その夢に向かって世界を広げていく」。図書館で毎回、家族分の４冊の絵本を選び、持ち帰り、返却することは決して楽ではない。それでも、息子が本を手に取り「これ読んで」と言う瞬間、その大変さはすべて喜びに変わる。

今後は、家庭における本の冊数や種類が、こどもの発達や夢の形成にどのような影響を与えるのかを統計的に調査し、良い成果が得られるのであれば、子育て世代の保護者へ積極的に共有していきたい。

「読み聞かせ」は、こどもの未来を形づくる力である
本を聞くたび、こどもは新しい世界を知り、また見る夢を育てていく
多くの子どもが夢を育めるように、
これからも「読み聞かせ」の価値を社会へ広げていきたい